

## 觀無量壽經所說說話文学の素材について

萩 原 健 定

觀無量壽經は淨土の三部として多くの人々に知られるところであるが、その構成は大体次のようである。

一、王宮における悲劇の說話

二、韋提希の致請になる十三觀法

三、仏の自説になる三觀九品往生の事

の三つに大別することが出来る。

しかしながら觀無量壽經の素材の検討については、今迄多くの学者によつてその研究がなされ、無量壽經や阿彌陀經、そして般舟三昧經などの淨土教諸經典の系統を承け、また諸觀經經典などと類似せる多くの点を含んでいることが論じられているが、觀無量壽經最

初の王宮における悲劇の說話については、二三の学者によつてその類似せる經典があることを指摘するのみで、その系統を明らかにしているのをいまだ見ない。

觀無量壽經は王宮の悲劇を機縁として説かれているものであつて、この說話が觀無量壽經の重要なポイントをなすものであつて、觀無量壽經の研究には、この說話は見逃すことの出来ないものである。

觀無量壽經には後に述べるように多くの類似せる說話經典を見るのであつて、それら經典群の考察によつて、觀無量壽經諸説の說話の素材を明すものであろうことが想像されるし、またその成立年代をも劃するも

のがあるようである。そこで私は以下その考察を試みることにする。

觀無量壽經に述べられる説話は余りにも有名なるものであつて、善導疏<sup>(3)</sup>にそれが詳しく述べられているところである。

この説話の成立は、頻婆沙羅王が幽閉せられたといわれる牢獄の趾が現在もなおインドに残っていることが知られ、「Mahāvamsa. 大史」<sup>(4)</sup>に、頻毘沙羅の王子なる大叛逆者阿闍世 (Ajatassatru) は、彼の父王を殺害して、三十二年間統治した。阿闍世の第八年に、聖者は涅槃に入りたもうた、といわれるように、仏涅槃に入る八年前にさかのぼるものである。また「十誦律」<sup>(5)</sup>「四分律」にも説話が見られ、Mahāvamsa と同じく仏滅後直ちに結集せられたものである。これらのことから大ぶん古くからの説話があつたもののようにである。この説話にはパーリー・チベット文のものもあり<sup>(6)</sup>、其の地方においても大変早くから流行していたものと思われる。このほかに漢訳經典に見られる主なるものを挙げると左記の通りである。未生怨經・鼻奈耶・毘婆沙論・涅槃經・阿闍世王問五逆經・雜阿含

經・阿毘達磨大毘婆沙論。根本説一切有部毘奈耶破僧事<sup>(7)</sup>

觀無量壽經の説話についての詳細な叙述は省略して、その構成について、諸經典群との関係を見るならば次頁の表の如くである。

次表によつて大体の諸經典の構造を知ることが出来るであらう。

觀無量壽經は最初に「爾時王舍大城有一太子。名阿闍世。隨順調達慈友之教」<sup>(9)</sup>と、提婆と阿闍世について述べてより始まり、「時韋提希自仏言。世尊。是諸仏土。雖復清淨皆有光明。我今棄生極樂世界阿彌陀仏所。唯願世尊。教我思惟教我正受」<sup>(10)</sup>と、韋提希が願往生を起すに終つている。しかし觀無量壽教は先に挙げた頻婆沙羅王の幽閉の事、韋提希が王に食物を運ぶ事、王が仏の教えを受ける事、韋提希の幽閉の事、韋提希が仏の教えを受ける事等を含んでいることは言うまでもないことである。ではこの觀無量壽經の説話は如何なる經典を引いて成るものであらうか。後で述べるが、觀無量壽經の説話が最初になつたものとするにはあまりにもその構成が文學的に出来すぎている。そういう



意味で、望月信享氏が經典の成立について、「東晉以後西域地方より來朝するもの相踵ぎ、又シナより渡印するものも続出した結果、当時インド等に存在せし經本は殆んど残りなく採訪されたかの觀がある。されば西歷五世紀以後は、訳經の年代がほゞその經典編纂の年代を示すものと見る事が出来る<sup>(11)</sup>」といつてゐることは承認出来る。また、阿毘達磨大毘婆娑論の所説は阿闍世が王位について後の説話である。根本説一切有部毘奈耶破僧事は、提婆と阿闍世のこと、頻婆沙羅王の幽閉のことがあるのみであり、鼻奈耶の兩訳増広したもので、これらは本論の關係するところでない。大般涅槃經は末生怨出生のこと、阿闍世が父王を害すること、韋提希がいろいろの藥湯を持つことがあるのみであり、西紀四一四―四三三の翻譯で、その成立は翻譯年代と大体一致してゐるようであり、これもあまり關係ないものと思われる。Mahāvāṇsa 「大史」には阿闍世が父王を殺害することを述べ、雜阿含經は、阿闍世が提婆に供養する説話であり、阿闍世五問五逆經は阿闍世王が王位に就いてからの事であつて、それらの經典は他のことを述べていない。婆沙論は

提婆が仏を害すること、提婆と阿闍世のこと、そして王が仏の教えを受けることを述べるのみで、阿闍世の出生の事や、韋提希のことを述べず説話の構成にいたつては不充分なるものである。末生怨經は、阿闍世の出生のこと、そして韋提希のことについて述べるところがなく、なほ説話が相前後して述べてある。四分律は大部早くから出来ていたものようであるが、末生怨の出生のこと、提婆が仏を害すること、そして提婆と阿闍世のことを述べるのみで、父王の幽閉のことを述べず、韋提希のことについてはあまり述べていない。十誦律は、阿闍世の出生のこと、韋提希の幽閉、そして仏より教えを受けることや願往生については述べないが、その構成は觀無量壽經説話に大部近い。また觀無量壽經に述べていない父王が牢獄より出でて殺されることをも述べている。鼻奈耶は阿闍世出生のことについて述べないが、十誦律に提婆が石を持つて仏を害し、後には人を二人、四人と倍倍と人を繰り出して仏を害してゐるが、鼻奈耶にもそのようなことを述べて、その説相においては同様である。また先の四分律には、石をもつて仏を害することはないが、人を二

人、四人と倍々と人を繰り出して仏を害することがあつて、十誦律、鼻奈耶と似通つたものである。以前の諸種の經典が韋提希についてあまり述べないのに反して、鼻奈耶には韋提希が仏の教えを受けることをも述べて、觀無量壽經の説相に一番近い。鼻奈耶は未生怨經、四分律、そして十誦律より發達した内容を持ち、これらより後に成つたものである。觀無量壽經のそれは四分律、大般涅槃經に述べる未生怨の出生のこと、そして四分律、十誦律、鼻奈耶に述べている提婆が仏を害する説話はないが、鼻奈耶よりは内容、構想からして文学的に發達したものであり、それらの經典を引きながら鼻奈耶を承けてなつてゐるもののである。韋提希の幽閉のことは見られないが、仏に教えを受けることが、鼻奈耶に見られるが、觀無量壽經に述べる韋提希の願往生の節、即ち「時韋提希白仏言。世尊。是諸仏土。雖復清淨皆有光明。我今樂生極樂世界阿彌陀仏所。唯願世尊。教我思惟教我正受」(2)の諸仏国土より阿彌陀仏国土を撰択するといふようなことは他に全見られないところである。

ではこの觀無量壽經の説話は何時頃になつたもので

あろうか。觀無量壽經の説話が十誦律、四分律、未生怨經の諸經を引き、そして鼻奈耶が一番觀無量壽經の説相に近いことは先に述べたところである。そこで鼻奈耶の成立についてであるが、サンスクリットに、*virṇayanidāna sūtra*とその名が見られるが現存せず、パーリー。チベットのものは見られない。西紀

三八二年に長安に翻訳せられてゐるから、それ以前の成立であることは確かであるが余り古いものではないようである。(3) また前述諸種説話經典は、四世紀の終りから五世紀の始めにかけて、一時に律の經典として翻訳がなされてゐる。觀無量壽經のそれは、それら諸種經典の翻訳後かも知れない。というのは韋提希が「雖復清淨皆有光明。我今樂生極樂世界阿彌陀仏所」と諸仏国土を撰択してゐることは中国初期淨土教の興隆と相待つものがあり、また觀無量壽經の得益分に「極樂世界広長之相」中略「願生彼国」(4)と述べて韋提希の願往生を述べ、同じく流通分に「行此三昧者現身得見無量壽仏及一大土若善男子善女人但聞仏名二菩薩名除無量劫生死之罪何況憶念若念仏者当知此人是人中分陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩為其勝友」中略「汝好持是

語持是語者即是持無量寿仏名云云」と説き明かすことは、発達した浄土教思想の裏づけがなくてはならないからである。

(註)

(1) 仏教經典成立史論 二二五頁 望月信享著

浄土教の起源及び発達 三二五頁 同著

念仏思想の研究 五八頁 藤原凌雪著

仏典の終始研究論文集連合学会編(文学、哲学、史

学連合編集) 卷四九一頁 月輪賢隆

仏教の美術と歴史 九七頁 小野玄妙著

観無量寿経における諸問題仏教文化研究第三号

三九頁 春日井真也

大乘仏教の成立史的研究 四八九頁 宮本正尊編

観無量寿教成立私考 大正大学学報一四 小沢勇貫

(2) 浄土三部経概説全 三三五頁 坪井俊映著

敦煌画の研究図像編 四五頁 松本栄一著

(3) 観経玄義分巻第一 浄土宗全書卷二 十七頁上

(4) Mahāvamsa 「大史」第二章摩訶三摩多之王系

「大史」四十頁 林五邦・平松友嗣共訳

(5) 十誦律卷第三十六 大正No. 428 vol. 23 P260a

四分律卷第四 大正No. 428 vol. 22 P5/90

(9) P. Pasadhyaya-Vinaya Katurvarga -

Vinayapitak Samya-Hanikaya Samanta  
Pasadikā mahāvamsa

(根本説一切有部毘奈耶破僧事。鼻奈耶にはペー  
ーのものがあつてゐる。)

T hphaga-payans - smya-nya-nan-las

hdas-pachen-pohinda hdn-l-ba gshi

S Vibhasa-sāstra Abhidharmamahavc-

bhāsā sashtra bhāsavinaya Samyak

tāgama Sarvāstivāda-Vinaya Sangha

bhedakavastu Vinayanidāna-sūtra

等の名が見られるが現存しなS。

(7) 仏説未生冤経

大正No. 507 vol. 14 P774b

鼻奈耶卷第五

大正No. 464 vol. 24 P870a

毘婆沙論卷第十一

大正No. 547 vol. 28 P497b

大般涅槃経卷第十九

大正No. 374 vol. 12 P474a

同卷第二十

大正No. 374 vol. 12 P483c

同卷第三十四

大正No. 374 vol. 12 P565c

阿闍世王問五逆経

大正No. 508 vol. 14 P775c

雜阿含経卷第三十八

大正No. 99 vol. 2 P276b

阿毘達磨大毘婆沙論卷第三十三

大正No. 545 vol. 27 P536b

同卷第十六

大正No. 545 vol. 27 P603b

同卷第一百八

大正No. 545 vol. 27 P616c

根本説一切有部毘奈耶破僧事卷第十七

大正<sub>6</sub>/450 vol. 24 P/87。

(8) 仏教文学物語 深浦正文著 参照

(9) 観無量寿経 大正<sub>6</sub>.365 vol. 2, P34Q。

(10) 同 大正<sub>6</sub>.365 vol. 2, P34/b

(11) 仏教経典成立史論 八一頁 井信壽著

(12) 観無量寿経 大正<sub>6</sub>.365 vol. 2, P34/b

(13) 仏教経典史論 四三一頁 赤沼智善著に鼻奈耶につ

いて次の如くしてして

「鳩摩羅仏提が前秦の建元十八年（西紀三八二年）に支那に連れて来た罽賓の耶舎が誦出したものであり、仏提梵書し、竺仏念が訳出し、曇景が筆受したものである。」

(14) 観無量寿経 大正<sub>6</sub>.365 vol. 2, P346a

(15) 同 大正<sub>6</sub>.365 vol. 2, P346b

— 以上 —